

「New Style Cruise ～with コロナ時代のクルーズスタイル～（国土交通省）」議事録

（開催要領）

1. 開催日時：令和2年12月8日（火曜日）第1部 10:00～12:00
2. 場 所：東京都 TKP 新橋カンファレンスセンター
3. 登壇者：
国土交通省 海事局長 大坪新一郎
観光レジリエンス研究所 代表 高松正人 ※観光危機管理専門家
商船三井客船株式会社 取締役 川野恵一郎
クルーズライター 上田寿美子
クルーズマスター 株式会社 JTB クルーズ部所属 中島秀二
国土交通省 海事局 外航課長 高木正人

（プログラム）

1. 開会挨拶 司会
2. 講演①「クルーズを取り巻く現状、安全・安心に向けた取組」大坪新一郎
3. トライアルクルーズの映像
4. パネルディスカッション
「New Style Cruise ～with コロナ時代のクルーズスタイル～」
ファシリテーター 高松正人
パネリスト 川野恵一郎／上田寿美子／中島秀二
5. 閉会挨拶 高木正人

* 敬称略・順不同

1. 開会挨拶

司会：

皆さん、こんにちは。「未来に向けて 知る・変わる・守る チームNEXT ステップ」シンポジウムをご視聴いただきまして、ありがとうございます。この時間は第1部「New Style Cruise」と題しまして、with コロナ時代のクルーズスタイルについて、ここ東京都からインターネット配信によるオンラインシンポジウムをライブでお届けしてまいります。本日の進行を務めます飯田浩司でございます。どうぞよろしく願いいたします。

さて今日は、国内のクルーズ船社が行っている船内の感染症対策を踏まえたコロナ時代における新しいクルーズの楽しみ方などについて、ご紹介してまいります。また各有識者の皆様によるパネルディスカッションを行いまして、クルーズ船社の船内、船の中での感染症対策の取り組みや、これからのクルーズへの期待などをお話ししていただきたいと思います

す。

それではまず初めに、今回のオンラインシンポジウムのテーマでもあります「New Style Cruise」について、映像でご紹介してまいります。どうぞご覧ください。

司会：

まずは「New Style Cruise」というもの、その政府の取組について、映像でご紹介しました。政府としてこういった準備をした、そしてこの先は現場がどう動くのか、その辺りを今日は現場の方々もお招きしながら、パネルディスカッションで深めていければと思っております。ぜひお楽しみください。

それに先立ちまして、「クルーズを取り巻く現状、安全・安心に向けた取組」について、国土交通省海事局長、大坪新一郎より説明いたします。大坪海事局長、よろしく願いいたします。

2. 講演①

大坪：

皆様、おはようございます。国土交通省海事局長の大坪でございます。本日は「New Style Cruise～with コロナ時代のクルーズスタイル～」と題しましたオンラインシンポジウムをご覧いただきましてありがとうございます。本日は皆様がお持ちであろうクルーズ船に対する不信感や不安感、「クルーズ船って乗って本当に大丈夫なんだろうか」という懸念を払しょくしたいという思いから、現在進められていますさまざまな取組をご紹介させていただくことになりました。

ダイヤモンド・プリンセス号は不幸な出来事でしたが、それを乗り越えて我が国のクルーズ船、飛鳥Ⅱ、にっぽん丸、ぱしふいっくびいなすは運航を再開しています。11月下旬から新型コロナウイルスの感染は再拡大傾向にあります。しかしこのシンポジウムは、内閣府の政府広報オンラインのホームページ上で今後2年間視聴可能となります。それを見据えまして、直近の感染状況とは切り離して、本日シンポジウムを開催させていただき、動画収録を行うこととしました。このシンポジウムをご覧いただくことで、皆様が余暇を過ごす選択肢において、安心・安全なクルーズ船の旅をぜひ加えていただきたいと思います。

まず簡単に我が国におけるクルーズの現状について、ご説明します。昨年2019年の日本人のクルーズ人口、つまり日本人でクルーズ船に乗って楽しんだ人の数は35万7,000人となりました。3年連続で30万人を超えています。クルーズ元年といわれた1989年は15万3,000人でしたので、ようやく2倍を超えたところまでこぎつけました。またクルーズ船で我が国に入国した外国人の方も215万3,000人となりまして、近年の外国籍クルーズ船の我が国への寄港の増加は、インバウンドと呼ばれる訪日外国人旅行者の増加にも大きく寄与してきました。これまでにSARSの流行やリーマンショックといった逆風を乗り越えなが

ら、少しずつクルーズ船の利用者を増やしてきたところでしたが、新型コロナウイルスの感染拡大という未曾有の厄災が襲いかかりました。

これは日本のクルーズ船3隻を紹介しています。2月下旬から10月下旬まで、実に8カ月間にわたり、お客様を乗せて運航することができなくなりました。想像することができなかった事態と言えます。このような状況に対して、4月末から幅広い分野の有識者の皆様からご意見を頂戴し、さまざまな検討を進め、10月下旬のにつぼん丸を皮切りに、日本船3隻による国内クルーズの運航再開までこぎつけることができました。

今度は外国の主要な船会社に目を向けてみます。これは11月30日時点の情報です。運航を休止したままの船会社、いったん運航を再開したものの再度運航を休止した船会社などがあり、各社とも苦戦しています。ただ、台湾やシンガポールなどを発着地とするドリームクルーズの運航は、今のところ順調なようですし、我が国をはじめ、アジア地域でクルーズ船を運航する船会社が頑張っています。

クルーズ船運航再開にあたっては、有識者の皆様からご意見を伺いながら、さまざまな検討を進めてまいりました。その成果物である中間とりまとめの策定にあたっては、国際医療福祉大学の医学研究科教授であり、感染症の専門家である和田耕治先生をはじめ、さまざまな有識者の方々にご意見を伺っています。

また中間とりまとめの公表と同時に、主に日本のクルーズ船社が加盟する団体である日本外航客船協会から船舶ガイドライン、これは船の中での対策を書いたガイドラインですが、それを公表し、同時に日本港湾協会から港湾ガイドライン、これは港の旅客ターミナルでの対策を書いたものですが、それを公表しています。

先ほどの動画の中でも中間とりまとめのポイントをご説明させていただきましたので、繰り返しません。船舶のガイドラインについては、船の中での安全対策を第三者がチェックする仕組みを取り入れていますし、さらに我々は衛生管理規程と呼んでいますが、船ごとにつくる感染症対策マニュアルを国に届け出る、その義務付けなどを入れ込んでいます。このように船内の感染症対策が確実に実施されるような仕組みを取り入れているということをおし上げておきたいと思えます。

クルーズ船は船舶ガイドラインに、また旅客ターミナルは港湾ガイドラインに従って、車の両輪のごとく、それぞれがしっかりと感染症対策を講じることが必要です。特にクルーズ船内では、どんなに対策を徹底して注意していても感染者が出ることはあり得ます。万が一感染者が確認された場合においても、船内での感染拡大の防止策を徹底することで、その他大勢の乗客や乗組員への感染拡大を封じ込め、クラスターを発生させないということを念頭に置いています。

クルーズ船内でどのような感染症対策が取られているか、皆様もご関心があると思えます。この後に船内の感染症対策の動画をご覧ください。具体的なかつビジュアルにお分かりいただけるかと思っています。

今後の取組ですが、商業運航がやっと再開された国内クルーズにおいて、船内での感染症

対策を徹底させ、まずは安全と安心を一つずつ積み上げることが重要と考えています。この積み上げによって、クルーズ船に対する不信感や不安感の払しょくにつながり、現在は3泊程度のショートクルーズを行っていますが、今後は日本一周のような長期クルーズの再開の足掛かりになると考えています。また次のステップですが、国際クルーズの再開にもつながっていくと考えています。国際クルーズの場合は、日本及び海外の感染状況や、相手国、日本の水際対策、これは入国管理や検疫の厳しさのことを言いますが、こういった動向を踏まえる必要がありますので複雑ですが、関係省庁とも連携の上、国際クルーズ用の船舶ガイドラインをつくっていきたいと考えております。

スライドは以上です。今述べたように現時点で取り得る感染症対策をしっかりと講じることがまず第一です。こうして国内でのクルーズ船の運航を軌道に乗せて、国民の皆様のクルーズ船に対する信頼を取り戻し、今後のクルーズ船の本格的な運航再開につなげていきたいと考えています。

本日は with コロナ時代における新しいクルーズの楽しみ方のご紹介をはじめ、パネルディスカッションなど、盛りだくさんの内容になっておりますので、ぜひ最後までご覧ください。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

司会：

大坪海事局長、ありがとうございました。この後は各有識者の皆様の、それぞれの視点から、クルーズ船社のこれからのクルーズへの期待などについてお話をいただくパネルディスカッションを予定しております。その準備が整うまでの間、ここで各クルーズ船社、それぞれの感染症対策に関する取り組みを、映像でご紹介いたします。ご覧ください。

3. トライアルクルーズの映像

司会：

飛鳥Ⅱ、につぼん丸、ぱしふいっくびいなす、それぞれの船内での感染症対策、その取組についてご覧いただきました。口で説明するよりも、具体的にいろいろ想像がついたと思います。2月、3月来、我々がこなしてきている新しい日常をやっているのだということが、ご覧いただいで分かったかと思います。

ここからは、有識者の皆さんによるパネルディスカッションを行っていきます。ではまずご登壇の皆様をご紹介します。まずはファシリテーターとしまして、観光レジリエンス研究所代表、高松正人様。続きまして、商船三井客船株式会社取締役、川野恵一郎様。クルーズマスター株式会社 JTB クルーズ部所属、中島秀二様。そして、クルーズライターの上田寿美子様です。皆様どうぞよろしくお願いいたします。

ではここからは、マイクをファシリテーターの高松様にお預けしまして、進行をお願いいたします。

4. パネルディスカッション

高松：

ありがとうございます。今日のファシリテーターを務めます高松正人です。よろしくお願いいたします。

私自身、旅行、観光の仕事を39年やってきましたが、その中でいろいろなところで船と関わってきました。例えば日本の国内における船旅を促進しようということで、日本旅行業協会、そして日本旅客船協会と一緒に合同事業で、どうやってツアーの中に船旅を入れていくかというようなこともお手伝いさせていただきました。

振り返れば、実は私、中学高校時代は四国の松山で過ごし、受験勉強に疲れると、瀬戸内海を見にいき、そこで癒やされたりということで、その頃から海や船がとても身近で大好きでしたし、実際船旅も好きです。

ここ10年ぐらい、東日本震災をきっかけに、観光分野の危機管理の仕事に飛び込みまして、今は観光危機管理の専門家、コンサルタントとして仕事をしています。今年はさすがに観光危機管理の中でも、新型コロナウイルス防止対策の仕事が7割、8割を占めているのではないかと思います。官公庁の新型コロナウイルス感染予防対策アドバイザーの役割も引き受けており、その一環として、旅客船を含む旅行観光関係業種の感染防止ガイドラインづくりにも参画させていただいています。

自己紹介はそのぐらいにして、今日のパネルディスカッションですが、テーマが「New Style Cruise~with コロナ時代のクルーズスタイル~」になります。思い返せばダイヤモンド・プリンセス号での感染拡大、これで本当にクルーズに対する安心感が損なわれてしまいました。冒頭のビデオや大坪局長の話にもありましたように、国内クルーズ船は2月から運航を止めており、この間お客様や寄港地の住民の方々の、クルーズに対する不安をなんとか解消し、安心してクルーズが再開できるようにということで、さまざまな取組を進めてられています。

私自身も、飛鳥Ⅱの試験航海に乗船しまして、一乗客として、船内の感染防止対策がどうなっているかを体験しました。はっきり言って、ホテルや旅館などの宿泊施設に比べてもはるかに高いレベルの対策、ちょうど皆さんも先ほど3社のビデオをご覧いただいたと思いますが、高いレベルの感染防止対策が船内の隅々に至るまで実践されていることを実感しました。こうしたことをより広く知っていただくことを目的としまして、今日は感染症対策を施した上での、with コロナ時代における新しいクルーズの楽しみ方、受け入れ地域の住民、クルーズに不安を感じているの方々に対して、わが国のクルーズ船社が実践する船内の感染症対策を、今日3人のパネリストの方、素晴らしいの方々をお招きしていますので、お話をいただきたいと思っています。

そして、今日のパネルディスカッションですが、冒頭にお断りいたしますが、すでに3人からご了解いただいています、皆さんの肩書でなしに、さん付けで柔らかく進めたいと思

っています。さて、この3人の素晴らしいパネリストですが、それぞれ自己紹介を兼ねて、ご自身とクルーズとの関わり、あるいはこれからのクルーズ再開に対する思いなどについて、一言ずついただきたいと思います。

では、私の隣にいらっしゃる川野さんからお願いいたします。

川野：

よろしく申し上げます。私は学生時代に東京の離島航路に就航する船でアルバイトをした、それが客船との関わりでの始まりでした。そして、そのアルバイト代で生まれて初めてクルーズを経験しました。まだクルーズという言葉が一般的ではない頃で、もちろん船も今のよう豪華なクルーズ船ではありませんでしたが、そのときの感動が今でも忘れられないでおります。若い人からご年配までが船内で打ち解けて、10年来の友だちのように楽しい雰囲気の中で船旅をすることができまして、本当にそれでクルーズに魅せられてしまいました。

1985年に商船三井客船に入社し、パーサー、そしてクルーズディレクターを務めて、昨年までジェネラルマネージャーとして乗務していました。船客部門一筋というところです。1人でも多くの人にクルーズを経験していただきたい、クルーズ人口を1人でも増やしたいという思いでここまでやってきました。それだけに、この新型コロナウイルス感染拡大による、クルーズの運航停止の期間中はとても辛いものでした。お客様のお顔も拝見できませんし、下船している乗組員とも会えませんでした。ただ、いつ営業航海が再開してもいいように、準備だけはしておくということを心掛けていました。

ピンチはチャンスと言います。クルーズがいかに感染防止対策に優れているかを理解していただきまして、with コロナ時代のクルーズファンを増やしていきたいと考えています。よろしく申し上げます。

高松：

ありがとうございます。それこそ学生時代から今までずっと海と船の生活をされていた川野さんにとっては、本当にこの数カ月間というのはきつい期間だったのでしょうかね。後ほどまた詳しくお話をお聞きしたいと思います。続きまして、中島さん、お願いいたします。

中島：

皆さん、おはようございます。中島です。私は宮崎で生まれまして、その後福岡でずっと育ち、根っからの九州人です。本日も九州福岡からお邪魔させていただきました。

1993年に旅行会社 JTB の方に入社しました。それから営業などもやっていながら、船との出会いがちょうど2000年でして、2000年に初代の飛鳥に乗船させていただく機会があり、その際に、ビスタラウンジという船首270度パーッと視界が開けるラウンジがあるのですが、そこでコーヒーをいただきながら大海原を眺めて、これはなんとも素晴らしい旅のスタイルだと、それ以来船のとりこになりました。ちょうどその頃スタークルーズという船が

博多にも来るようになりまして、それがご縁で、そんなに船が好きならクルーズの仕事をやってみろというようなことで、それ以来クルーズのお仕事に携わらせていただいております。

2012年にクルーズマスターという資格の認定をいただきまして、通常のクルーズの業務のかたわら、いろいろなところにお邪魔させていただき、クルーズの進行ということで、講演会やいろいろなセミナーにも参加させていただいて、1人でも多くの皆様にクルーズの良さ、素晴らしさ、醍醐味を味わっていただければというところで、活動させていただいております。

このコロナ時代、私どももこの運航が停止している時間は何とも言えない気持ちでしたが、ようやく運航も徐々に再開を始めました。ぜひクルーズの今を知っていただいて、多くのお客様にご乗船いただければと思っていますところです。どうぞ今日はよろしく願いいたします。

高松：

中島様、ありがとうございます。今明るい顔で話されていますし、魅力も語っていただきましたが、多分この半年間ぐらいつと暗い顔をしていらっしやっただのではないかと思います。最後と言っては失礼ですが、トリということでご紹介いただきたいのが上田様です。クルーズライターというお立場で、ある意味ではお客様の立場であり、またその体験をいろいろな人に伝えていく仕事をされています。お願いいたします。

上田：

おはようございます。クルーズライターの上田寿美子です。私が初めて客船に乗ったのは、1957年、3歳のときでした。そして約32年前からクルーズライターという、クルーズを乗船取材し、執筆や講演を通してご紹介していくという仕事をしてきました。

ところで、今年1月の後半から2月にかけてまして、私はヨーロッパで複数の地中海クルーズの取材をしていました。そのときに海外のニュースを通してダイヤモンド・プリンセスの新型コロナウイルス集団感染のを知り、大変心配をし、連日ニュースを見ていました。そしてその後、私もしばらくしてから日本に戻りました。しかし、今年はやはりクルーズ業界は大きな打撃を受けまして、一時世界のほとんどのクルーズが運航を中止していました。

そして日本では、今お話にもありましたように、今年の11月から飛鳥Ⅱ、にっぽん丸が営業航海を再開しました。営業航海というのは、一般のお客様を乗せて運航する通常のクルーズのことですが、私も飛鳥Ⅱ1回、にっぽん丸1回乗ってきましたので、今日はその実体験に基づきまして、実際の感染症対策、船上生活の様様、お客様の反応や港の受け入れなど、利用者視点に立ってお話しさせていただきたいと思っていますので、どうぞよろしく願いいたします。

高松：

上田さん、どうもありがとうございました。今まではクルーズの魅力伝えることに力を入れてこられたのではないかなと思いますが、今日はぜひ皆さんに安心をお伝えいただきたいと思います。よろしく願いいたします。

皆様から自己紹介を兼ねて、ご自身とクルーズとの関わりについてお話をいただきましたが、ここから本格的なパネルディスカッションに入っていきたいと思います。早速ですが川野さん、にっぽん丸はトライアルクルーズを経て、やっと営業航海始まりましたね。クルーズ再開に至るまで、どんな経緯、どんなロードマップがあったのでしょうか。

川野：

にっぽん丸は今年2月から4月までドックに入りまして、改装工事を行っていました。それ以降のクルーズが中止となってしまったわけですが、クルーズの信頼や安心を取り戻して、1日でも早く営業航海を再開するために、感染防止対策の準備を進める日々が始まりました。

何よりもクルーズを再開するためには、ガイドラインに準拠した、クルーズ船社としてのマニュアルを作成し、認証を取得することを急がなくてはなりませんでした。9月に国土交通省から中間とりまとめが公表され、日本外航客船協会と日本港湾協会のガイドラインが策定されました。このガイドラインに準拠して、新型コロナウイルス感染症予防対策マネジメントマニュアルを作成しました。その実効性を認証していただくために、第三者機関であります日本海事協会による、感染防止対策状況の審査、また感染者発生から陸上搬送に至るドリルを行いまして、その審査を受けて、10月16日に鑑定書、いわゆる本認証を取得しました。そしてその後、1泊2日のトライアルクルーズを経て、念願の営業航海を再開することができました。

当面は国内クルーズのみとして、本日現在、一般募集型クルーズの実施は12航海目を数えています。クルーズの日数は、ショートクルーズから始めまして、年内は2泊3日までとしています。乗船客数も、船客定員の約半数から始めて段階的に引き上げていく計画です。

高松：

順調にステップを踏まれてきているという感じですね。今にっぽん丸では、随分いろいろな対策を準備してこられたということだったのですが、具体的にどんな取組を船内でされているのでしょうか。

川野：

現在取り組んでいる感染防止対策の三つの柱となりますのは、まず一つ目は、感染者が乗船するリスクを減らす。次に、船内で感染者が発生するリスクを抑える。そして、乗船客や乗組員への感染拡大リスクを抑える、この三つです。言わば「持ち込まない・うつさない・広げない」、これが感染防止対策の3本柱になります。

まず一つ目の「持ち込まない」ですが、乗船前に発熱がないか、体調を崩していないか、海外渡航歴がないかなど、ご乗船いただくための自己申告をしていただきます。また、事前にPCR検査を受けていただくことをお願いしています。次にご乗船当日、受付の際にスクリーニングを行います。体温計測、健康質問表の提出などです。これらによりまして、乗船に適さないと判断された場合には、乗船をお断りすることで、感染者が乗船するリスクを減らしています。お客様だけでなく、当然ながら乗組員に対しても同様です。乗船後すぐに船医の健康チェックを受け、そしてPCR検査を行います。検査結果が出るまでは個室で隔離待機となります。乗組員へのウイルス検査は継続的に行っています。

二つ目の「うつさない」につきまして、船内での取り組みです。まず船側の対策としまして、船内各エリアを時間を決めて定期的に清掃、消毒しています。主体となる乗組員は、公衆衛生の専門機関で清掃、消毒のトレーニングを受け、資格を取得しています。

お客様にご理解とご協力をいただきながら行う対策は次のとおりです。まず、基本的にマスクの着用、そして頻繁な手洗いや手指の消毒、サーモグラフィーによる体温計測とそのデータ管理、また寄港地での上陸・帰船の際も、体温計測を行っています。さまざまな場所、さまざまな場面でソーシャルディスタンスを確保しています。

これまで密集、密接となっていた場所は、座席数の削減や入場者数の制限などを行い、密を回避しています。食事はビュッフェスタイルでの提供をやめまして、サービス方法を変更しています。また、密接が避けられない、社交ダンスなどの一部のイベントや、サウナなどのサービスを一時的に中止しています。

3本柱の三つ目、「広げない」です。有症者が発生した場合の対応計画を策定して、感染拡大リスクを抑えます。有症者と判断された場合、速やかに隔離措置を取ります。隔離が必要になった事態に備えて、隔離用の客室を備えています。有症者発生の時点で、船内全ての営業やサービス施設、イベントをいったん休止して、全てのお客様に自室待機をお願いすることになります。

同時に、濃厚接触者の特定が早く行えるように、につぼん丸では独自のアプリを開発導入して活用しています。これはマスクを脱いで飲食をする場所、ダイニングやラウンジ、バーなどで、来場されたお客様の乗船証に印刷されているQRコードと、座席のコードを読み取り、いつどこに着席されていたかを追跡するものです。そして検査の結果、感染していることが確認された場合は、その事実を速やかに船内にお知らせして、クルーズを中止とし、下船港へ向かう計画としています。港湾側とも事前に協議し、港に戻った場合の手順、感染者の搬送方法、濃厚接触者への対応をあらかじめ決めていきます。以上のような取組を行っています。

高松：

すごい。本当に徹底した、「持ち込まない・うつさない・広げない」ですね。ところで、最近寒くなったということもあって、建物の中空気がよどんでしまって、そこに感染リスク

があるということで、換気の話が随分出てきていますが、船の中の換気はどうなっているのでしょうか。まさか、ずっと航海中窓開けておくわけにはいかないでしょうか、どんな具合ですか。

川野：

全ての客室、および航室と乗組員の居室の一部は、100%外気を供給しています。これは1時間に6回、すなわち10分に1回の換気が行われていることとなります。一部のエリアでは外気を30%から50%取り入れた循環空調となっていますが、次のような抗ウイルス対策を導入しています。

まず、UVC 殺菌灯です。写真をご覧くださいますが、感染症病棟でも採用されているもので、これは高出力の紫外線を照射することによって、ウイルスやバクテリアを除去して循環空気をきれいにしています。さらに、船舶空調向けの抗菌・抗ウイルスフィルターを装備しています。この抗ウイルスフィルターは、にっぽん丸にある全ての吸気・排気ダクトに装着しており、ウイルス低減化率は、2時間で99.995%というデータがあります。この他にストリーマ技術という、放電による高速電子が有害物質を分解する大型空気清浄機をダイニングルームに導入して、ウイルス抑制を図っています。また、客室や航室にも空気清浄機を設置しています。

そしてもう一つ、船内の人が集まる場所が密となっていないか、換気の状態を確認するCO₂濃度センサーで監視をしています。この表示が1,000ppmを超えますと、CO₂濃度が高い、すなわち密集しているということになります。ご説明したとおり、船内でも換気に対するご心配は必要ありません。

高松：

なるほど。ここまでできていれば安心ですよ。とは言え、現在まだトライアルクルーズ、やっとな国内での短期間の営業航海に進んだという段階ですが、今後もっと長い航海、あるいは、さらに海外も含めた航海に進めていくためには、これからどんな取組をお考えでしょうか。

川野：

現実的には、外国に寄港するクルーズを実施するためには、さらなるハードルがあると言えると思います。ガイドラインやマニュアルの国際クルーズ版を作成することや、寄港する海外の港湾の受け入れ体制や感染状況、水際対策などの見極めです。しかし国際的なルールが整備されていけば、さほど遠くない時期に国際クルーズが実現できるのではないかと考えています。

一方で、国内クルーズにつきましては、クルーズ日数を増やしていくということは、寄港地の数も増えていくということですから、各港湾、各寄港地の自治体や医療機関との連携を

これまで以上に強化していくことが必要です。

クルーズの日数を増やしていくために今行うべきことは、感染防止対策を確実に講じて、目の前の一つ一つのクルーズを着実に、無事に完了させていくことだと思います。そのためには、これまで説明しました数々の感染防止対策及び感染者発生時の対応計画を、継続して監査、検証、改善、実行といった、言わばPDCAサイクルに乗せていくこと、そして乗組員への教育・トレーニングをたゆまなく続けていくことです。ご説明しました感染防止対策をしっかりと確実に講じて、お客様には安全安心の船内で快適にお過ごしいただきたいと思えます。

with コロナ時代のクルーズは、これまでと少し様子が違うかもしれませんが、どのような逆境でも、私たちはお客様を楽しませる情熱と工夫する力を失ってはいません。ご覧いただいている写真は、クルーズが運航再開した後の、最近の船内の様子です。お客様に久しぶりのクルーズを楽しんでいただいています。with コロナの時代にあっても、変わらないものは、美しい海、楽しい船内、おいしい食事、そしてお客様の笑顔です。クルーズの魅力には、新型コロナウイルスも太刀打ちできないと思います。以上です。ありがとうございました。

高松：

どうもありがとうございました。クルーズの魅力にはコロナも太刀打ちできない、そうですね。今のお話を聞いていると、楽しい時間を安心して過ごそうと思ったら船に乗ってくださいと言ったらいいのではないかと、こんなような気がしてきました。今、川野さんから、本当にクルーズ船内の感染防止の徹底した取り組みというのをお話しいただきましたが、中島さん、これまでクルーズ楽しんでこられたお客様というのは、今どう感じいらっしゃるのでしょうか。不安もありながら期待もあるというような状態ではないかと思いますが、いかがでしょう。

中島：

実際、11月の2日から営業航海が始まりました。それに先立って、いわゆるクルーズの発売、商品の発売がありましたが、いち早くも待ち望んでいたと、この日を待っていたと多くのお客様からお声もいただきまして、実際にご予約をたくさん頂戴しました。年末年始のクルーズなどは、すでに満船のクルーズも出ているというところではあります。ただ、中には空いているクルーズがあるのも事実です。本当に待ち望んでご予約していただいて、ご乗船いただいているお客様もいらっしゃいますが、一方で、やはりクルーズに対して漠然とした不安、「おっかないな」など、そういったクルーズに対しての安心・安全に対しての不安をお持ちのお客様がいらっしゃるのも事実です。

換気のお話が川野さんからありましたが、船内に限られた空間ですから、空気がうまく回らずに、なんとなく空気がよどんでいるのではないかと。万が一感染された方が発生した場合

に、他の方々も船内に缶詰になって、何日間も船を降りることができなくなるのではないか。実際にそういったご質問、お声を頂戴したこともあります。今、川野さんのお話もありましたとおり、万全の対策を準備して運航再開をしていますから、実際そういうことはないのですが、やはりそういった不安をお持ちのお客様には、きちんとした正確な情報を的確にお伝えすることが極めて重要なのではないかと考えているところです。

高松：

中島さんがおっしゃられたとおり、先ほど川野さんから、万全というか、本当にここ安全だよねという話がありましたが、それがどの程度お客様や、あるいはもうちょっと広く消費者の皆様伝わっているのでしょうかね。

中島：

そこはやはり課題感を持っています。お客様にお伝えをする場、セミナー、説明会、オンラインでのいろいろな動画などという努力はしていますが、本日のこのシンポジウムもそういう位置付けだと思います。こういった場できちんとお伝えしていくということは極めて重要ですが、まだまだ浸透はし切っていないのではないかと考えています。今後そういった場面を多く取りまして、現在の感染対策についての取組をきちんとお伝えをしていく。実際にご乗船になられるお客様もそうですが、寄港地、発着をする港、そこにお住まいの地元の皆様方、その方々のご理解なくしては、クルーズは成り立ちません。そういった地元の皆様方に正しい情報をお伝えしていくためには、事業者、船社、旅行会社、そういった事業者と、地元の自治体の皆様方とタッグを組んで、連携をしながら、一体的にそういった情報をお伝えしていくということも大切なことではないかと考えています。

高松：

地元の方々、寄港地の方々とタッグを組んでいくというのは、本当に大事なところですね。特にクルーズの場合、それがなかったら船が入れませんからね。

中島：

そうなんです。

高松：

ありがとうございます。こうした取組をしているということを皆さんにお伝えしたときに、多分受け取り方は二つあるのではないかと。一つは、「これだけやっているから安全なんだ、大丈夫だ」と受け止められる方と、「そこまでしないと船乗れないの？」という受け止め方をされる方もいらっしゃるのではないかと。「それだったらまだしばらく船乗れないな」という方もいるかもしれません。どうでしょう？

中島：

それはもうおっしゃるとおりです。実際お客様に、「こういった感染対策を施されていますよ」というご案内をさせていただきますが、「そこまでやっていらっしゃるんですか、これはもう安心ですね。じゃあ乗ります」というようなお客様もいらっしゃいますが、一方で「いやちょっと、そこまでするんだったら、もう少し様子を見ようかな」という方もいらっしゃるのも事実です。

ただ、やはり with コロナ時代の旅のあり方というのは、感染対策という、事業者側もそうですが、ご利用になられるお客様も一定程度そこはご協力というか意識も持っていただいて、そしてご乗船いただくということが大切なことだと思います。実際ご乗船されて、お帰りになられた方からは「船の中は言われたとおりすごく安心だった」というようなお声も多くいただいております。

高松：

実際乗っていただくとそれが分かるんですけどね。中島さんの場合はクルーズを販売するという立場ですが、どんな働き方や情報提供をしたら、今までクルーズを楽しんでくださった方が、「じゃあ、もう一度船に乗ってみようかな」という気になるとは思いますか。

中島：

何度も申し上げますが、今、施されている感染対策を正確にお伝えするという事は、まず不可欠ではないかと思えます。また、先ほども申し上げましたとおり、感染対策というのは、事業者側だけのものではなくて、一定程度お客様にもきちっとご理解していただくということも重要です。事業者側の感染対策と、それからお客様のご協力と、これが合わさって初めて100%の感染対策になると考えています。

実際ご乗船になられて、私も試験航海に乗ってそうでしたが、乗組員の方がフェイスシールドをして、今までのクルーズの船内とはやはり違うわけですね。ですので、最初はぎょっとしますが、QRコード当てるなど、そういったご協力もいただかないといけないですが、これもすぐ慣れますが、私自身も慣れてきました。

事前にご乗船になられる前に、正しい情報、それからご協力、ちょっと手間はかかりますが感染対策のためにご理解くださいと、ご乗船後にギャップがないように、正しく事前にご案内するということが非常に大事なのではないかと考えています。

高松：

私自身も、先ほど話しましたように、飛鳥Ⅱのトライアルクルーズに乗船しまして、あらためて、本当にクルーズはいいなということを感じましたが、中島さん、最後にお聞きしますが、営業運航を再開しましたが、今までのお客様だけではなくて、再開したクルーズ、ど

んなターゲットにどういう形で訴求していくと、もっとクルーズ需要の喚起ができると思いますか。

中島：

高松さんがおっしゃられたとおり、私もトライアルクルーズに乗船させていただいて、クルーズの良さ、最初自己紹介で申し上げましたが、大海原を眺めて、ゆっくりとコーヒーなどをいただいて、太陽がゆっくりと水平線に沈んでいく夕景、そういったクルーズ、船上からしか体験できないような、クルーズならではの醍醐味というか、船内でのゆったりとした時間、こういうクルーズの原点を、私も試験航海で久しぶりに、1年ぶりに乗船させていただいて、「やっぱりクルーズって素晴らしいな」と思いました。クルーズの原点に立ち返って、この醍醐味というのはお客様にお伝えしたいと感じましたので、クルーズご経験済みのリピーターのお客様だけではなくて、今のこの時代だからこそ、まだクルーズ未経験のお客様にも、ぜひご案内していきたいと思います。

船というのは、乗組員の方々と、お客様の方々と、同じ空間で生活しながら旅をしていくというスタイルなものですから、一種独特の一体感というものが生まれてきます。お客様、乗組員、それが一体となって、感染対策を施しながら、そして豊かなクルーズの旅を楽しむ、この合わせ技ですよ。感染対策と楽しい旅と、これを合わせながら旅を進めていくというのは、何かしら、このwithコロナ時代の旅のスタイル、こういう旅のスタイルというあり方を、このクルーズというのは最もあるべき姿なのではないかなとも感じているところです。そういったところも、未経験のお客様にもぜひご案内して行って、1人でも多くのお客様にご乗船いただきたいなと思っています。

高松：

ありがとうございます。未経験の方々、特にこのコロナ疲れや、ステイホームでずっともってましたという方々が、大海原を見ながらコーヒーゆったり飲んだら、随分心が晴れてくるのではないかなと思いますよね。

中島：

温かい気持ちに、こういう時代だからこそ、そういった気持ちを感じていただければなと思います。

高松：

そうですね。ぜひ多くの方々にクルーズの素晴らしさを知っていただきたいですね。ありがとうございます。

さて、上田さん、今お2人がお話しくださったように、徹底した感染症予防対策があるわけですが、そうすることによって、クルーがフェイスシールドをしているなど、これまで

のクルーズライフとはちょっと異なる面が出てきますよね。そうした対策を当分はやめるわけにはいかないと思いますが、あるということを前提にすると、今後のクルーズはどんな楽しみ方ができるのでしょうか。そういったことがあるけれども、このように楽しめるよという辺りを、ぜひお話いただきたいと思います。

上田：

私も乗船前に指定の PCR 検査を受けて飛鳥Ⅱ、につぼん丸、乗ってまいりました。そして、港では検温、健康質問表の提出など、今までよりも念入りな乗船手続きが行われましたので、水際対策が取られていることをまず感じました。これには乗客の協力も必要だなと思いました。

そして実際の船上生活ですが、with コロナ時代らしいなという船上イベントもありました。例えばその一つが、につぼん丸で行われましたマスクづくり教室です。これは材料をもらって、VTRを見ながらマイマスクをつくるという、これは実際につぼん丸で私がつくってきたマスクですが、クルーズ生活中にも取り替えるマスクとして大変役に立ちました。

そして一方、飛鳥Ⅱは今年大改装しまして、新しく船上に露天風呂ができました。この露天風呂を利用する際にも人数制限、そして検温が必要になっていました。私は夜、露天風呂に入りに行きましたが、肩までお湯につかりますと、露天ですから、暗い海からザザーン、ザザーンという波音が聞こえてきて、そして見上げれば満天の星空、とても気持ちが良かったので、次の朝もまた入りに行きましたら、今度はうってかわって、朝日の昇る海、そして移り行く島影という、本当に爽快感のあふれる入浴タイムとなりました。私自身も、今年は新型コロナウイルスの影響で、ほとんどの仕事がなくなってしまうというような厳しい状況でしたので、肩がこっていましたが、船の露天風呂に入っていると、なんだか肩こりが和らいだような気もしました。

ところで、コロナ前のクルーズでは、1日にたくさんイベントを用意して、娯楽が多彩で退屈しない旅というのも一つのクルーズの魅力だったと思います。ところが、先ほど川野さんがお話してくださったように、やはり船上生活には制限があり、今はできないイベントも出てきましたので、イベントの数や種類が減ってきていることも確かです。しかし、かえってゆっくりと海と親しんだり、自分自身の時間を楽しむというのはやりやすくなってきたかなと思います。

今回私も久しぶりにゆっくり海を眺めてみました。そうしたら、ある日目の前にボラの大群が現れて、海からポンポンポン飛び跳ねるところを見ました。これまでイルカやクジラを船から見たことはありましたが、ボラを見たのは今回初めてでした。それから先ほど中島さんもおっしゃっていました海を見るということですが、私は久しぶりに本も読んでみました。これも自宅で作るのは一味違いました。なぜなら、ページを繰って顔を上げると、目の前に大海原が広がっていました。これで心が明るくなりました。

またにつぼん丸でも飛鳥Ⅱでも、船上でショータイムやコンサートは行われていました。

これも席を離したり、ステージにスクリーンを置くなど、そういった感染症対策は行われていました。通常、陸上でしたら、コンサートが終わると皆さん電車やバスに乗って帰られると思いますが、船ではコンサートの後は、その余韻を引きながら歩いて自分の客室に帰ることもできます。その途中船のバーに立ち寄って、1杯飲んで帰るということもできますが、このバーも、アクリル板を置いたり消毒をしたりして、感染症対策が行われていました。

そしてこのクルーズ中、私はある方から声を掛けられました。その方は長年クルーズに憧れていて、今年定年退職になったので初めてクルーズにやってきたという方でした。その方がおっしゃるには「申し込んではみたけれども、今クルーズに行っても危ないんだらうかと心配していました。しかししっかりとした感染症対策が行われていたので安心しました。そしてクルーズにやってきたら、なんと言ってもお料理が素晴らしい。今、陸上では、コロナ禍で外食というのはちょっと行きにくい感じがしていましたが、久しぶりに船の上でごちそうを堪能しました。サービスも素晴らしいと思いました。マスク越しではありますが、笑顔を絶やさず、心のこもったサービスをしてくれたので、本当に癒やされました。今回初めて来ましたが、とても楽しかったので、また近いうちにクルーズに絶対に乗りに来ます」とおっしゃっていました。

今回、with コロナの今ではありますが、実際に初めて乗った方が楽しんで、そして癒やされて、また乗りたいと思ってくくださるようなクルーズが行われているということもお伝えたくて、今日はこの話をさせていただきました。

高松：

素晴らしい。先ほど中島さんから、新しいターゲットとして今まで乗っていない人という話がありました。まさにそれですね。

上田：

まさにおっしゃるとおりです。

高松：

今お聞きしていたら、今までのクルーズでやっていたできなくなったことを数えるというよりも、むしろこの状況の中で、いろいろなアクティビティは減ったけれども、それによって本来のクルーズの楽しみがあらためて見直されてくる、ゆったりとしたときというのがあるのではないかというような印象を持ちました。

さて、船の中は本当に素晴らしいという、安心できるしゆったりとした時間が過ごせますが、国内はどこか寄港地に行かれたわけですね。その港での受け入れはどうでしょう？まだ寄港地の地域の方々というのは、「クルーズ船来るの？またウイルス運んで来るんじゃないの？」みたいな不安を感じていらっしゃる方もいらっしゃると思いますが、どんな受け入れやもてなしがあったのでしょうか。

上田：

まず、にっぽん丸では愛知県の蒲郡港に行きました。それから、飛鳥Ⅱでは和歌山県の新宮港に行きました。二つの船ともに、寄港地では検温をしてから上陸ということになっていました。まず蒲郡港ですが、岸壁には幾つか物産展が出ていましたが、この出店者の方たちも、検温と健康質問表を提出することになっていたそうです。つまり、互いに「持ち込まない・うつさない・広げない」という対策を取っていたわけです。そして蒲郡港では大変歓迎をしてくださいます、蒲郡市の鈴木市長をはじめ、関係者の方たちが岸壁でにっぽん丸を出迎えてくださいました。そして出港のときには、今度は手筒花火という、筒に火薬を入れて、それを人間が抱えて火柱を上げるという、ダイナミックなお見送りもしてくださいました。

一方、新宮港では、約1年ぶりに客船を迎えるということで、こちらでも歓迎をしてくださいます、新宮市の田岡市長もまた岸壁まで出迎えていらっしゃいました。そして出港のときには、熊野水軍太鼓という、威勢のいい太鼓のお見送りをしてくださいましたが、それに加えて、地元の方が大勢岸壁に船を見送りに来てくださいました。その方たちが密にならないように少し間隔を空けながら、出発する船に向かって声を揃えて、「さようなら、ありがとう、また来てね」と叫んでくださいました。これは本当に感動しました。久しぶりに地元の方と心が通い合ったような出港シーンを体験しました。

もちろんこういった港で歓迎してくれるというのは、乗船客にとってうれしいことです。しかし、今回寄港地に着く前は多少の不安はありました。それは、先ほどからお話に出ていますように、やはり今は客船を受け入れるというのはいかがなものかと考えている方もいらっしゃるからです。しかし、蒲郡港と新宮港ではこのような対応をしてくださいましたので、私はこの二つの港では、大変安心して上陸し、観光や買い物を楽しむことができました。

クルーズは、その地域に経済効果や賑わいをもたらすと言われます。また港がしっかりと受け入れ対応をしてくれると、それはクルーズの安全航海と乗客の満足度につながると言われています。しかし、やはり今コロナ禍ですので、クルーズの来航に不安を持っている方もいらっしゃるでしょうから、ぜひここは、先ほどもありました、いわゆる港と、それからクルーズ、これが協力して感染症対策を行い、まず近隣の方々の信頼を深めていただきたいと思います。その後も両者が協力し合って、この難しい時代を乗り切っていくってほしいなと思っています。

高松：

素晴らしいお話でしたね。まだ1人も感染者が出ていない新宮において、その住民の方々がお見送りで「また来てね」というのは、本当に涙が出そうな言葉ですよ。

上田：

本当に涙が出ました。そしてこちらも「また来ます」と返しました。

高松：

今3人の方からいろいろなお話をお聞きして、楽しいひとときでしたが、もうこのパネルディスカッションの終わりの時間が近づいてきました。もっともっといろいろなお話をお聞きしたいのですが、最後になりましたが、お一人ずつ今日のお話の中で一番のエッセンスのような部分、短く一言ずつ頂戴できますでしょうか。今度は逆に上田さんからいいでしょうか。

上田：

私は今回二つのクルーズに乗船させていただきまして、他の旅と比べても、大変念入りな感染症対策が取られているなと思いました。これは実際飛鳥Ⅱでインタビューして知った話ですが、まず飛鳥Ⅱでは、しっかりとした水際対策を取る、しかし万が一それでも船内で発症してしまったときに備えて、PCRの検査機を3台積み、なおかつ検査技師さんも乗船しているそうです。そして、有症者を隔離できる部屋を20室用意し、しかもウイルスが外に出ないよう、この20室は全て陰圧化できるそうです。

今年の12月には、ぱしふいっくびいなすもクルーズを再開しました。私はまず日本では、この飛鳥Ⅱ、につぼん丸、ぱしふいっくびいなすが、慎重にクルーズを再開し、そして安心・安全なクルーズを積み重ねて行って、ぜひ日本の方にクルーズの信頼を取り戻して行っていただきたいと願っています。今日はどうもありがとうございました。

高松：

ありがとうございました。では中島さん、一言いただけますか。

中島：

私のほうから見ていても、船会社の皆様方、この8カ月間止まっていた中で、試行錯誤をしながら感染対策のことをいろいろと考えて、ご努力をされているところを横から見ていました。実際運航が再開されて、私の横にいらっしゃった乗組員の方が、久しぶりの乗客の方々を乗せたクルーズが出るということで、横でウルウルとされていらっしゃいました。その顔を拝見したときに、私も胸が詰まる思いがしました。それほど情熱を持って、感染対策をきちんと施されていらっしゃって、今お話ありましたとおり、少しずつ着実に、無理をしないように運航を再開されていらっしゃいます。

このwithコロナ時代だからこそ、そういった感染対策は絶対大前提、これに乗っかる形で、プラス楽しいクルーズの醍醐味を味わっていただくことがとても大事だと思います。このwithコロナ時代だからこそ、ぜひ安心してご乗船いただいて、窮屈な時代ですが、少しでも豊かな温かい気持ちになって、そしてまた人と人との交流というか、心のつながりみた

いなものを感じられるのもクルーズならではのと思いますので、そういったクルーズ、ぜひご乗船いただいて、1人でも多くのお客様に味わっていただければなと思っていますところ
です。本日は本当にありがとうございました。

高松：

ありがとうございました。では最後に川野さん。

川野：

新型コロナウイルス感染症によって、クルーズは確かに大きなダメージを受けました。しかし、長い停止期間、船が止まっている期間を経まして、久しぶりにクルーズの運航を再開したときに、ご乗船されたお客様から「この日を待っていたわよ」とお声を掛けていただいたり、あるいは寄港地で、寄港地の関係者の方から「ようこそ、おかえり」と言っていたいたり、あるいは「陸にいるよりも船内のほうが安心だ」というようなお声もいただきました。

感染防止対策を備えた上で、安全・安心の上に、いつでも変わらないクルーズの楽しさがあります。with コロナの時代であるからこそ、大海原に乗り出して潮風を浴びて、そして美しい景色を見て、船内でくつろぐ。それによって日頃の感染防止対策で疲れていらっしゃる心と体を、クルーズで癒やしていただきたいと思います。今日はどうもありがとうございました。

高松：

ありがとうございました。本当にお三方に素晴らしいまとめをしていただきました。安全な船で、お客様も、乗組員も、そして寄港地の地域の方々も、安心できるクルーズ、これから再スタートがどんどん進んでいきます。今日ご覧になっている皆さんも、ぜひご参加いただきたいと思います。今日は以上でこのパネルディスカッションを終了したいと思います。ご協力ありがとうございました。

司会：

皆様、どうもありがとうございました。それでは閉会に際しまして、国土交通省海事局外航課長、高木正人よりごあいさついたします。高木外航課長、よろしく願いいたします。

5. 閉会挨拶

高木：

ただいまご紹介をいただきました、国土交通省海事局外航課長の高木と申します。まず、ファシリテーターの高松様、パネリストの皆様、ご多忙の中ご参加誠にありがとうございました。大変貴重なお話を伺うことができたと感じております。またさらに、今回の政府広報、

そしてこの本シンポジウムの運営にご尽力された皆様方、感謝申し上げます。

パネルディスカッションをお聞きしてあらためて感じましたが、そのときどきの感染状況、これを踏まえながら、住民、そして乗客の皆様の不安、そして不信を取り除きながら、安全・安心を一つずつ積み上げていく、積み重ねていくということが、with コロナ時代のNew Style Cruiseの基礎になるのではないかと感じた次第です。

パネリストの皆様から、クルーズ船内の徹底した感染症対策、またクルーの訓練ということについてお話がありました。クルーズ船の感染症対策、ハード面、設置されている機器などに目を奪われがちですが、その背後でたくさんのクルーの方々が、熱意を持ってというお話もありましたが、一つのチームになって、一生懸命訓練をして、安全・安心を積み重ねようと努力されているということ、私も船内で、乗らせていただいて感じたところです。ぜひこの安全・安心を支える取組を続けていっていただければと思います。

そしてパネリストの方々から、営業運航再開後に、寄港地でいろいろな歓迎があったこと、初めてクルーズ船に乗られた方々が非常に楽しかったと、そしてまた乗りたいとおっしゃっていたという声をご紹介いただきました。安心を積み重ねて、乗客や皆様の不安を少しでも取り除き、そして皆様方の期待に応えていく。楽しかった、また乗りたいという声をつなげていく。このようなことが今、国内の短期間のクルーズを再開していますが、もっと長期間の国内クルーズ、さらには国際クルーズの再開といったことにつながっていくだろうと考えていますし、この動きを政府としてもバックアップさせていただきたいと考えています。

視聴者の皆様方には、最後までご視聴くださり誠にありがとうございました。このシンポジウムがクルーズ船の感染症対策の全体像、これを目で見ていただくことが実際できたわけですが、またwith コロナの時代にあって、クルーズ船に乗船する、あるいは寄港するといったことに対するさまざまなご理解を賜われれば大変幸いです。本日は長時間どうもありがとうございました。

司会：

高木外航課長、ありがとうございました。そして本日ご講演いただいた皆様、ファシリテーターの高松様、パネリストの上田様、中島様、川野様、ありがとうございました。以上をもちまして、「New Style Cruise～with コロナ時代のクルーズスタイル～」オンラインシンポジウムを終了とさせていただきます。今日のシンポジウムが、新たなクルーズスタイルを知っていただく参考になれば幸いです。

以上